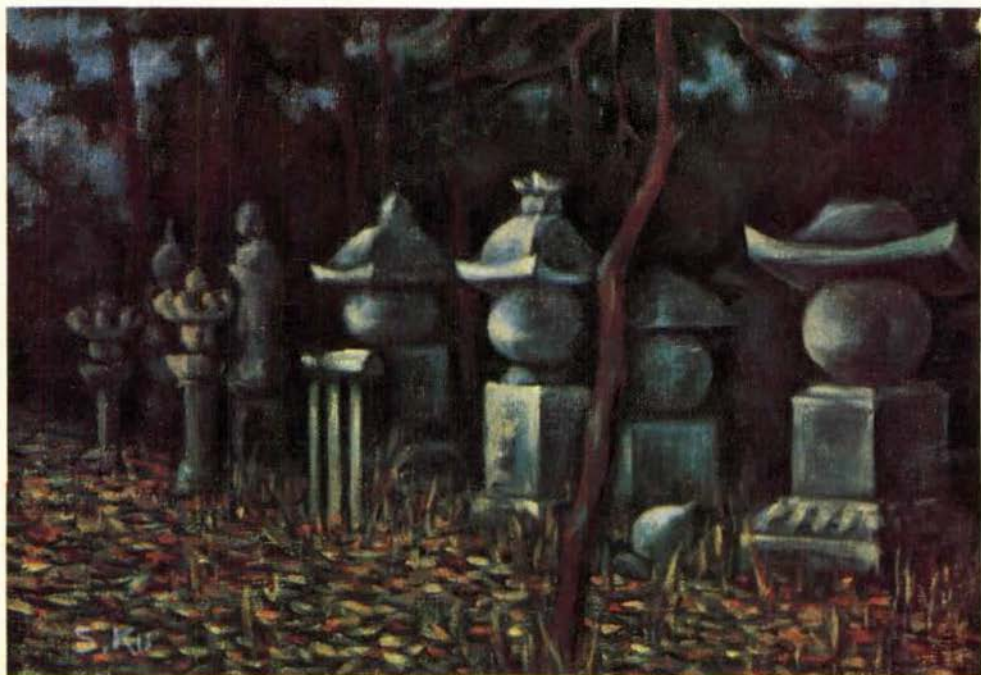


浄土

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十日（特別授承認雑誌） 第三二五号
昭和五十年一月二十五日印刷 昭和五十年二月一日発行



第四十二号

第二号

1975
2

念悦坊

願求

乙卯如月八日

願求

遠田弘俊

(東京小石川慈眼院住職)

遠い昔、世自在王如来のみ前で独りの菩薩が「願」を建てられました。その菩薩を法蔵と申しました。そしてやがてその願を成就して「ホトケ」となられたのです。私はそのことを今静かに朝の勤行の折りに想うのです。あまりにも私の小さな願いに比べて「ホトケ」の「願」の大きいことに驚かされ通します。私は此の世に生まれてからは何を一体願い求めて来たでしょう。親の乳房を求め、花を求め、異性を求め、榮譽を求め、その中に在つて辛うじてその日その日を生きることの満足を求め、そして今日も亦無事に暮れんことを求めているに過ぎないのではなからうか。之れが私の願求であるとするならば、その願いは単に煩悩として慚愧の二字に葬られて行くであります。戦後既に三十年、今年も亦街を流す寒念仏の鈴の音、徒らにビルの谷間に空しく消えて、人心荒涼として、何か身に沁みる寒風は、何時の日にか涅槃を「願求」することとなるであります。噫々。

乙卯如月八日

念悦坊

二 月 号



目

次

願 求	遠 田 弘 俊
八百年前の私であったらば	林 靈 法…(2)
〈ねはん会によせて〉二つの御遺訓	小 俣 昌 雄…(4)
現代のモラルを考える①「悪」	
悪について—その是正と回復を求める—	野 坂 勉…(8)
罪惡生死の自証—人間教育の原点—	土 屋 光 道…(11)
明日に生きむ	森 邦 夫…(16)
ご法語に聞く 法然上人の人と生活②	
人身を受けた喜び	宝 田 正 道…(20)
欧米宗教見聞録①「教会」	安 居 香 山…(24)
願 心	大 南 竜 昇…(29)
ハガキでひと言	中 牧 千 秋…(31)
經典に聞くシリーズ⑫ 仏説無量寿經卷下〈6〉	村 瀬 秀 雄…(32)
念仏ひじり三国志⑩ 法然上人をめぐる人々	寺 内 大 吉…(39)

表紙 久住 静雄画

—カット 大正大学美術部—

浄土開宗八百年にめぐり会って、微力ながらご奉仕をさせていただき、法然上人のご生涯と信仰とを多少とも深く味わさしていただいて、今日しみじみと思うことである。それは、若し私が八百年前にこの上に生れ出ていたならば、いまのこのよるこびを果して持つことが出来たかどうかというこ

八百年前の 私であつたらば



—大本山知恩寺法主—

林 靈 法

とである

すでに、この人界に生き得ることの、いかにむづかしいことであるかは、釈尊が譬えをもって説かれているところである。蒼穹の天上界から一本の細い糸がするつと地上に垂れて来た。それを盲目の人が、針の穴に通そうとして右往左

往しているのである。これは全くできぬことである。この事実より更にむづかしいことが、人界に生を得ることであるというのです。

まことにその通りであらう。この大宇宙ができた原初より、無数の太陽系の中の一つの地球が冷くなつて、地球上に微生物が始めてより、そして、ようやく人間が生まれ出て、それから今日の文明文化が生れ出て、その尖端に今日生を得ているのが私であつた。だから、只今ここに一瞬一刻の生を受けているその背景には、いく億兆万年の彼方から、まことに時間的空間的には無量の尊いお育ての縁が、無量に重なり合つてこそである。だからその無量の縁の中のただ一点すらかけても、いまの私は生まれ出ることはできなかったのだ。このおそだての無量のご縁こそ、浄土教的にいえば、浄土よりこの地上の歴史の中に還来された無量の仏菩薩の化用であつた。

まことに、この地上への生をうけることは、実に有り難いことである。絶対にむづかしいことである。だからすなおに受けて、まことにあり難いことであつた。

× × ×

しかし、ここで問うてみる。この地上に生を受けることによるこびも、それが若し法然上人の出でました以前のことで

あったら、果して私は今日うけとっているようなよろこびを、しみじみと味い得たのであろうか。おそらくば不可能なことであつたらう。

法然上人がこの時代の宗教を、人間救済に欠くところあるものとして批判せられているように、学もなく、徳もない私共はゆきつくところを見失つて、とんでもないところへ徘徊歩いていたことだろう。

それならば、法然上人の出でました同時代に出合いのご縁を得たならばと、勝手な思いをめぐらしてみるのである。ところが、「信誘ともに常の人に過ぎたり」と、当時の人々から評を受けられた法然上人である。おそらく私ごととき凡人は、法然上人の信仰にこそ、あの悲風董々たる乱世の悲しみを救いとられていく大きな世界があることを、とてもまともに受けることはできなかったであらう。

同時代の愚衆というものは、一人のすぐれた清澄な人、至徳の人というものを高きところに置いて、これを崇敬するすなおな心持ちというものを持とうとはしないのである。大衆というものは、いつの時代でも歴史にのこる高貴なる人間をも、自分たちと同じ地平にまで引きずりおろそうとするものだ。平均人にまで叩き落さねば承知しない、非情的な人間なのである。雄偉な人、特に信仰界の英雄などは、歴史的な時

間の経過を置いて眺めてこそ、その至徳の姿は光輝を示してくるものである。私とて衆愚の中の一人として、おそらくば、法然上人のお名前をうかがったところで、まるで馬耳東風であつたらう。

× × ×

それが、法然上人開宗八百年後に生れ出た私は、安心して清澄の人、至徳の人法然上人の念仏に迫って行くことができたのである。

人界に生を得ても、その五十年、八十年を生まれて、食べて、くそたれて、そして灰になるだけであるならば、それは叡山の谷合いに五百年千年の間亭々と並ぶ杉の木立にも劣るものだろう。それがこの地上に生を受け、今日法然上人の念仏に迫ることによって、真人生めざめを与えられ、この身が減んでも、更にそれより宇宙の浄化発展のために還相位のはたらきをさせていただくことができるという、雄偉な浄土教信仰を深めさせていただくことを得たのである。

まことによろこびの中よろこびである。

このよろこびを、私の周囲の方々に少しでも多くお伝えいたしていくことが、只今の私の仕事なのである。そうした光を求め、道を求めている一個半個の友を求めて、今年もまたご奉仕させていただく。



△ねはん会によせて▽

二つの御遺訓

小 俣 昌 雄

(大本山増上寺布教師会常任理事
東京都品川区戸越・行慶寺住職)

○沙羅双樹の下で

昔、インドの北、ヒマラヤの高い峰々を仰ぐ山裾にクシナガラという街がありました。その郊外にある清らかなサーラの林に、その日、二人の出家が入って参りました。

そのお一人は、たいへんお年を召した方でありましたが、いとも気高く、きわめて有徳の方であることがひと目でわかりました。ただ御病気の御様子で、木陰に布をのべられますと、静かにお身体を横たえられたのでございます。もう一人の方はそのお弟子らしく、まめやかにあれこれとお世話をし

ておられました。

そのお年を召した御出家こそ、お釈迦さまその人であり、そのお世話をして居られるのは、お弟子の阿難尊者であります。

お釈迦さまは、その時すでに八十歳の高令でありましたし、ここ数年来背の痛みが進んで居られたということでもありますから、体力の衰えも又自然のなりゆきであったと申せましょうが、実はここへ来る途中、チュンダという人の御供養をうけて、その時召し上った葺の一種に食当りをされたのが、殊更お身体を弱らせることになったのであります。

お釈迦さまの御病気を伝えきいて、多ぜいのお弟子たちを

はじめ、街や村の人々がつめかけてまいりましたが、皆息をひそめるようにして、ただお釈迦さまの御容体を見守るばかりでありました。

殊に、自分の不注意から、取りかえしのつかぬことになったことを知ったチュンダの歎きは申すまでもありません。

お弟子たちは、生命あるものがやがては別れなければならぬことを、道理としては良く辨えていましたし、余り取り乱す者も居りませんでした。目のあたりにお釈迦さまの御入滅近きをみますと、或る者はチュンダを責めてみたり、また今まで何かにつけ親しくお釈迦さまのお導きを仰いで来た者にとっては、これからどうしたらよいであらうかと、心も動揺し勝ちのものも多く居りましたから、重苦しい静寂がそこを支配して、皆々胸ふさがる想いでありました。

○そこで示されたこと

お釈迦さまには、まわりの人々のこうした気持がよくわかりでありましたから、御自分の入滅をどう受けとめるべきか、また、滅後皆が何をよりどころとすべきかなど、仏道を成就するために大切な事柄を、じゅんじゅんと静かにお話になられたのでありました。

それは、仏遺教経として伝えられていますが、お釈迦さまが特に「御自分の滅後のために」とお示しになっているように、これは他の經典とは別にして、お釈迦さまが私たちのために残された「御遺訓」として拝読しなければならぬと思います。

既に、お釈迦さまは御自分がこの世に於ける生涯を閉じるべきときが来ていることを良く御存じでありましたから、先ずチュンダについてはその不注意は、大きな生死の流れからみれば小さい事柄で、お釈迦さまの生死を左右した等と大袈裟に考えるのは誤りであるし、同時に、そういう些細なことと思われれることの中にも深い因縁をくみとらねばならないことを語られて、結果だけからくやんだり、せめたりしてはならないとおさとしになりました。

それから御自分の滅後のことについては、お弟子たちの心構えを中心に、先ず仏教徒として、定められた戒を大切に保つこと、常に精進すること、いたずらに論争をしてお互の和合を乱してはならないことなどについて、詳しくおさとしになって居りますが、更に毎日それぞれ自分の頭に手をおいて、出家にふさわしい生き方をしているかどうか内省しなさいとも言われて居ります。

そして更に、お釈迦さまは言葉をついで、皆が私を師と仰

いたのは、私が説き明した仏法の道理を聞き、その道理にしたがった私の生き方に接して、「なるほどそれは真実の法である」と心から肯定をしたからこそ、私と俱に精進を重ねてきたのであるから、今まで私たちが毎日よりどころとして来たものは「仏法」そのものであったはずである。

たとえ私がこの世を去っても、この仏法の道理そのものはお互の心の中に生きているのであるから、これからこの「法」そのものをともしびとし、まことの師としてゆくがよい。

むしろ、いままでとかく私というものを依りどころとし勝ちであったが、これからは己が内なる「仏法」の道理の声をよりどころとして生きゆきなさい、と力強くお呼びかけになったのでございます。

○その根底にあるもの

勿論、そこでお説きになったことは既にそれまでに、いろいろの機会に御説法になったことでありますが、それを御臨終に当って、重ねて御遺訓になられたところに、お釈迦さまの並々ならぬ御配慮がうかがわれるのでございます。

それは、お釈迦さまが人間の弱さを悲しいほどよく知って

居られたからでございます。

お釈迦さま御自身、その出家求道の道程に於いて、己が内なる魔性とたたかいを重ねられて、それを超克することが如何に容易でないかをよく知って居られました。

そして恐らくはその御生涯を通じて、折にふれ、魔性のさきやきをきくこともあったと思われるのでございますが、みずからの煩惱をよく制する力を具えられましたがゆえに、常にそれにうちかつて来られたのでありましょう。

しかし、お釈迦さまがまわりの人々に御眼を向けられたとき、そこにはやはりお心をいためることが少なくありませんでした。

いまその一、二の例をあげてみますとお釈迦さまが、キョーシューミという処においてになった時に、お弟子の間に論争が起りまして、お互にゆずろうとしません。お釈迦さまは何度か御注意になりましたが一向に止めませんので、遂にただひとりその地を離れてお弟子たちに強く反省を求めたことがあります。

本来、そのような争いの世界を否定して仏門に入ったはずの人たちが、みにくく争うのをみて、お釈迦さまのお心はどうであったでありませんか。

また、ダイババツタという人が、ひとたびはお釈迦さまの

教えを受けながら、功名心ゆえに、みずから異義を唱えて分派反抗するということもありました。そしてお釈迦さまの生命を奪おうとさえたそうではありますが、お釈迦さまにとつてダイバダッタは憎しみの対象ではなく、そこにも救われねばならぬものをみて、心をいためられたのでした。

お釈迦さまが鹿野苑で始めて仏法を説き明されてからのその御生涯は、常に、このようなぬきさしならぬ悪業に押し流され勝ちなものと見捨ててしまえない尊いお心によって貫かれていたのでありまして、そこには同じ人間の業苦を負うて、この世に生命をうけたものとして、ひとごとならず思う心がお釈迦さまの精神の根底となつていたのでございます。

○もう一つの御遺訓

二月十五日、それはお釈迦さま御入滅の日であり、涅槃會のつとまる日であります。かのサーラの林に於いて、滅後のことについておさとしになりながらも、お釈迦さまは、或は皆が皆自分の教え示す通りに仏道を成就してくれるかどうか、心もとなない想いをされたかも知れません。現に私たちをこのおさとしの前に立たせたとき、私たちはそのおさとしの百分の一も実現出来ずにいる自分を唯々恥じ入る他ない有様

であります。

しかし、このような教いようのないもののために、かの淨土の三部の經典によつて伝えられて居りますように、お釈迦さまは

もし私の説くところを聞いたならまさに願いを發して、かの淨土を志しなさい。なぜならば、かの諸々の上善の人と俱に一处に会することが出来るからである。

と御教示になつて居りまして、これこそ力なき私たちによつては、何より大切なお釈迦さまの御遺訓であると、頂戴されていただいている次第でございます。

私たちの宗祖法然さまが、「われは戒定慧の三学の器にあらず。わが身にたえたる法門ありやと」求められた末に、このお釈迦さまの「お念仏のすすめ」の御教示を仰ぎ得て、「一代の法をよくよく学すとも一文不知の愚鈍の身になして……ただ一向に念仏すべし」とのお言葉をお私たちにお残しいただいたからこそ私たちのようなものでも、生きゆく支えをもつことが出来たのでございます。涅槃會の日、ほの暗い御本堂の涅槃圖からは、横たわれたお釈迦さまが、深い慈悲の眼ざしで、今の私たちにまで呼びかけているお声がきこえてくるようです。あわただしい暮しゆえにこそ、このお釈迦さまの御遺訓を心にいだいてゆこうではありませんか。

『悪』

『現代のモラルを考える』

〈第一回〉

悪について

—その是正と回復を求める—

野坂 勉

(大正大学助教授)



最近さかんに社会的弱者という言葉が使われている。

これは、インフレという嵐の中、春闘の激しいウネリによつて掘り起された老人、母子、障害者の生活が、政治課題として浮かび上つてきたことによるものである。ここでは、そのもっとも矛盾のあらわれている老後問題を中心に考えてみたいと思う。そこには、人生をまっとうする大切な時期に、人間らしく生きることを不可能にし

ている事態が、さまざま発生しているのであって、これこそ現代の悪そのものだといわなければならないからである。

(一)

われわれの生活の仕組みにおいては、社会的強制支出といわれる、電気・ガス料金、交通費、保険料などの占

める割合が大きくなっている。最低限の生活を営むにも、どうしても支出せざるを得ないこれら公共料金の値上りは、そのまま収入の固定した低所得階層の生活を追い詰めることになる。物価高騰が、老人、母子、障害者世帯など社会的弱者を直撃するというのはこの意味である。

この物価上昇の影響をまともに受けているのは、貯蓄、退職金の預金などの利子と、恩給、年金などによって生活する老人である。そもそも、これら老人の預貯金や、受給している年金の元になっているものは、若い時代に営々として積み立ててきたものであると同時に、その時代の産業基盤の育成資金（低利の融資）や、輸出振興、鉄道、道路、港湾、住宅などの建設資金として、政府によって計画的に運用されて今日の社会を築いてきたものである。だから、われわれが今、恩恵をこうむっている社会的諸施設、消費財は、老後生活に入っているこれらの人々によって与えられたものである。してみれば、老人の預貯金の利子、年金は、その賃貸料ともいべきであって、現在の評価額は、不当に抑えているものだといわなければならない。

ところで、これから年金をまかなうやり方を、現在の

積立方式（貯蓄型）から、賦課方式（子、孫が生活費をみる扶養型）に改めるという要求が出はじめている。この年金の財政方式には、専門的な問題はあっても、国や社会に対する老人の不信、不満から出ていることを見逃してはならない。いずれにしても、懸命に働いてきた庶民を、正しく報いず、かえって苛酷に鞭打つにひたしいインフレを阻止し得ない政治・経済のあり方は、生活を破壊し、相互不信をつくり出すなど人心を荒らす、現代の悪そのものだといわなければならない。

(二)

また社会的なあり方として、次のような風潮と傾向が強くあることが指摘される。特に大都市では、核家族という家族形態―夫婦と子どもによってつくられた生活が中心となつて、祖父母、若い叔父母と共に生活しているイメージを思い浮かべることが難しくなっている。

これは、子どもを養育することが親を扶養することが、殆ど断ちきられていることをあらわしている。このことは昭和三〇年以降の高度経済成長下にみられるようになった、農業を離れて工業に就く、そして農村から都市に

移り住むという社会構造の変化から生まれてきた生活様式そのものでもある。

戦前では、家業という生産基盤を中心に、それを守ってきた者と、継ぐ者といった関係が成立して、そこで子どもの養育も、親の扶養も営まれてきたのが、大半の庶民からはその基盤がなくなってしまっているのである。

子どもが成長、発達するためには、親の養育を受けなければならぬと同様、年老いた者が生きて行くためには、身の廻りのことについて介助されなければならぬことがふえてくるのはごく当り前のことである。しかるに、一人暮らしを余儀なくされ、年老いた夫婦が、看護に疲れて無理心中をはかったり、寝たきり生活に絶望して自殺することが止まない現実は何をもの語るのだろうか。

たしかに、親の子どもを育てることは無償の行為として美しい。が、その一方的な行為のみで、子の親に対する扶養行為の成立を阻む社会構造なり、年老いた親との関係が欠落した生活様式を支配的たらしめている社会のあり方はまた、現代の悪といわなければならない。

(三)

今日では生活の問題は、そのまま社会に押し出されてくる。それを引受ける体制を整えることが、社会保障、社会福祉の充実であると解される傾向がある。これは本来、夫婦単位に考えた場合、子どもが育てられ、老親の面倒をみられるように、経済的、社会的条件を整えたり、それに必要な生活手段を提供するなど、社会的に解決することを前提にしている。決して社会が、そっくり肩がわりする政策をとることではないのである。

この老後問題の取組みにおいても、一定の所得を老人に保障することによって家事や身の廻りの世話は、家政婦や、看護婦を雇えばよいという考え方があろう。しかし、この辺のところを営利事業にまかせるといふことは病院の附添婦の現状にみられるように、必然的に金持ちしか雇えないことになってしまうし、また人の面での当り外れを免れない。

一方、必要な施設、処遇の供給体制を整えることは国家なり社会の責任であるとする立場であっても、原点になるのは、社会福祉サービスは、人がやることだということ

とである。家族すら負担となる仕事に従事する人間を養成しようということは容易なことではない。入院を要する老人患者の激増、老人ホームの待機人員の増加は、老人の介助や養護を、社会的手段に委ねようとしても、それに従事する人の面で制約されてくることを示しているのである。

いずれにしても、人まかせにしようとすることができない相談でないことを自覚してかからなければならぬ問題なのである。「世話になった人を世話する」、「つくしてくれた人には、正しく報いる」し、報われるのだとい

うごく当り前のことから出発し、この相互関係を社会的に確立し、信頼感と安定感をつくってゆかなければならない。そのためには、預貯金を目減りさせたり、年金を安く抑えたりといった一方的な犠牲を許してはならないのであって、まじめに働いてきた人の老後の資金を踏みつけにして利益をむさぼる徒輩をはびこらせるなどの不正を是正する政治を実現することである。そして世話になった人に、社会につくしてくれた人に報じ、人の手助けを必要とする人に、力をかす行動を一人一人が進んでとることを、今程要求されている時はないのである。

罪惡生死の自証

——人間教育の原点——



土屋 光道

(大正大学講師)

仏教の根本原理に三法印がある。「諸行無常、諸法無

我、涅槃寂靜」——これこそ、この世界と人生に対する

時代を超えて変らない真理であります。そしてこの無常・無我の理は、抽象的な理念や教条といったものでなく、この現実ありのままの世界の実相、人生の真相であります。従つてこの現実の無常を諦視し、この無我の原理を自覺して、己が人格と生活の中に涅槃の眞実を現成してゆくことが仏教者の人生態度であり、逆に、この理より隔離し、この法に違背するところに、迷妄煩惱に縛られた虚偽造惡の人生がある訳です。

仏教の立場から観る限り、この原理こそ、すべての時代のモラルのよつて立つべき土台であり、この基盤を認めず、この真理を忘れたところに、現代のモラルの頹廢と混乱、諸惡の根源があると云えます。従つて、仏教者はこの原点に立ち還つて、現代のモラルや惡について発言してこそ、その存在の意味があるし、またそうする責任があると思います。

さて、明治以来わが國に流入し、今日までの日本の思想を形成した近代西欧の思想は、無常と無我という人間の生命と能力に対する有限性の自覺とは逆に、むしろ死を忘れて常住を希求し、何よりも自我を主張して、その

欲望達成を至上とする思想でした。科学の發達と經濟の發展とは、愈々人類の未來についてバラ色の夢をいだかせました。しかし、今日、その夢は打ちくだかれ、日本のみならず西欧世界全体で精神の荒廢が顯著となり、人間は群集の中にあつて孤独、人間相互の生々とした連帶感はずすれ、無氣力、無関心、無責任におちいり、生きがいを失つて、虚無のなかにさまようヒッピー、或いは、現体制の破壊にはけ口を求める過激派グループにはしる、人々は現代に懷疑以上の深い絶望を感じています。ここに、生々とした相互信頼の人間關係、即ち、新しいモラル、現状打開の清新な光が求められています。いまや、常住と自我を中核とする近代思想が根源から問い直されているのです。

この世界的・世紀的要請への応答は容易なことではありません。外から押しつけたり上から与えたり、木に竹をついだり、或いは衣を着替えるように無常、無我の仏教思想を持ち出して解決するといった性質のものではありません。まづ先に自らが血を流し涙する懺悔の中に無常・無我を我が生活に実証することから始める以外はあ

りません。

この点で、平安時代の末、貴族社会の崩壊の中に法然上人は深く時をはかり機を省みて、それに相応する教えを選択されました。この宗祖の求められた道程こそ、われわれのたどるべき道標だと思えます。上人はその末法の危機を時代に洞察されると同時に、罪惡生死の凡夫性を悲歎の中にわが身に自証徹底されたのです。この点我々は時代や社会を批判するに急で、この罪惡生死の反省自証がまことに稀薄であり不徹底であります。無常・無我の道理が主体的に受けとめられた姿が生死流転・罪惡深重の凡夫の自覚にほかなりません。この自証の手がかりをどこから始めたらいいでしょうか。

○
こうした自覚、内省力において、今日の社会が甚だしく劣っているのは、やはり教育に大きな責任があります。そこで、特に戦後の教育理想、期待される人格目標について、いささか考えてみたいと思います。

いつでしたか、NHKのテレビで、沢山の先生と父母を集めて、教育の理想についての公開討論会がありました。

た。司会の鈴木アナウンサーが、「将来どういう人間に子供を育てたいと思うか」という問いを提起し、会場は勿論のこと会場以外の意見もあらかじめ集計し、グラフで表示していました。それは用意した十以上の意見の中から各自に一つを選ばせ○をつけさせたものでした。そこで、圧倒的多数で選ばれたのは、自分の子供達が『将来、他人に迷惑をかけない人間になって欲しい』という項目でした。

「他人に迷惑をかけない人間になる」そのことは一見まことに結構なこととも云えます。しかし、実はそこにこそ重大欠陥があるのでないでしょうか。

この思想は、西欧に発生した人間の基本的人権に関する主張に由来します。

フランス革命の「人権宣言」第四条「自由は、他人を害しないすべてをなし得ることに存する」に始まり、近代国家の諸憲法にうたわれ、民主主義の原理としてよく引合いに出される考えであります。

この他人に迷惑をかけない人間を旗印として戦後の日本教育が行われた結果、果してその理想が実現したでしょうか。今日、自分の権利を主張し、自由勝手に振舞

い、他人に迷惑を掛けていないかの顧慮どころか、全く他人に対し無感心な人間が非常に多くなった。戦後は昔の世間という束縛から解放され、家も崩壊して核家族化し、更に最近では、そのマイホームの核そのものが更に核分裂して人間相互の温い連帯感が失われ、孤立したバラバラの個人となつて、そこに、人格と人格とにかような真心とか親切、そうした人倫（モラル）が断絶し枯死してしまつた。皆がむき出しの我利を追求し、我見を押し通し、我執の争いに明け暮れている。

これに対して仏教の無我の原理は、この宇宙間に独立的な自我の存在を否定し、一切の存在が縁起の法によつて存在することを説きます。その思想からするならば、

「他人に迷惑をかけない人間」などあろう筈がなく、すべての人が、過去において、現在から死に至るまで、否、死んでなお多くの他人に迷惑をかけそのお蔭で存在することが出来ている。早い話しが、自分がお母さんのお腹に宿って誕生するまで、更に赤ちゃんから大人に育つまで、わが父母にどれだけ多くの迷惑をかけて来たことか、更に父母に限らず、わが兄弟姉妹、社会の人々に、迷惑をかけぬどころか、どんなに自分が気がつかぬ

間に、両親の生命を締め相手に血と汗を流させたことが多いことか。或いは、自分が母の胎内に生を受けた為に、この世に出損なつた、生れそなつた兄や妹が必ずいるに違いない。自分が大学へ入学した為に、不合格になつて涙をのんだ見知らぬ友が一人必ずいる筈である。

しかも、その迷惑は単に人間だけに限らない。私が着ている着物、その為に何匹の蚕の生命や羊の毛が消耗されたか、私に食べられた、牛や豚、お米や野菜は大変な量だ。かくの如く天地一切の血と汗と生命との犠牲によつて、生み出され育ち支えられて来たこの自分であります。

過去より現在、更に未来にかけて、迷惑を**かけない**どころか、いかに多大の迷惑をかけているか、逆に云えば、いかに多くの他力のお蔭、御恩によつて今日の自分があり得ているか、又病氣をし、老いかつ死ぬまでどんなに他人の世話になることかそのことをはっきり自覚することが無我の自覚、罪惡生死の凡夫の自証であります。

この原理から考えるなら、「他人に迷惑を**かけない**人

間」などあり得よう筈はなく、すべてが「他人に迷惑をかけ他人のお蔭であり得ている人間」ばかりであります。そこに御蔭を感謝し、少しでも迷惑をかけぬよう、更には、自分の頂いたお蔭や御恩を頂きっぱなしでは、御飯を頂いてお金も払わずに食い逃げするのと同じである。少しでも、自ら努力し、他人さまから頂いた好意に利子をつけ、より多くの人々に少しでも喜んでいただけるようお返ししてゆく人生でなくては、申訳がない。ここに、報恩・奉仕の気持が自然に湧いて来る筈であります。他人から何かをいただいたり、或いは思わざる御迷惑をかけていることに気付いたとき

「すみません」「相い済みません」

と云うのは、そのままに済ましておくことが出来ない、何とか、よりよいものをお返しし、お酬いせずにおれないという自然の気持であります。人間お互いが、いつ病み死ぬかわからぬ、いつ人を傷つけ殺めるかわからぬ無常な存在であり、いかに多くの迷惑罪惡を他人や万物にかけることなしには生きられない無我の原理が人間教育の原点でなければなりません。

こうした生命連帯の心情は、まさに無常・無我の自覚より生まれ育てられるので、自我の欲望達成を優先する「他人に迷惑をかけない限り自由」という精神からは絶対に生まれません。

この無常と無我の原理にいかに関心が振れているかという自覚を、最も深く厳しく自省し追求したものが「浄土教」であります。

念仏の心は、真実を求めるその心が、

「自身はこれ現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこの方、つねに没し、つねに流転して出離の縁あることなし」と、自己の凡夫性を深く信知し、そうした自己を救わずにおれぬ、如来無量寿、無量光の大願業力が不断無尽に注がれていることに目醒めることにあります。

無常を無常と知らずに煩惱生死の闇に流転し、無我を無我と知らずに自我に固執して傷つけ殺し合いの惡業を繰り返している。この「罪惡生死の凡夫」こそ、古くして常に新しい人間の姿そのものであります。ここに、今こそ、浄土教の深い人間省察とその自覚とが人間教育の基本原理として評価されるべきであります。この反省自覚なきところに救いはないと思います。



明日に生きむ

森 邦夫

(町田市ボランティア会会長)

霧のように煙る細かい秋雨が藤沢街道のアスファルトを濡らし冷たく光っていた。

朝から気にしていた空模様が午後になってとうとう雨になった。

九月半ばの日曜日だった。

その雨の藤沢街道を私は今、妻の運転する車で、義父の眠っている横浜霊園に向って急いでいた。

義父の死後、毎月の例になっている墓参のためである。

すでに四時半を廻った頃だろう。小高い丘陵の雑木林に囲まれた義父の安息の地である横浜郊外の霊園に着いたのは。

広い霊園は、立ち並ぶ墓石や墓標が雨に濡れて、もの静かにしずまりかえり、肌にくすくす寒い初秋の夕ぐれの気配を漂わせていた。

その日は、所要で思わず時を過ごし、夕刻の墓参となり、

なにはなしに気ぜわしく供養をすませたあと、いつもの慣わしで義父の墓前にその後の自分達の生活の報告をしたりして、義父の成仏を祈り、ほっと一息入れているときだった。このような場所で、また、この時刻に、まことに不似合いな奇妙な雑音が、聞くともなしに私の耳に不思議な感覚をもたらしてきたのである。

ふりかえって、その奇妙な音の方角に私はなんとなく目をやった。そして、よく見なおして驚いた。

霧雨に暮れなずむ夕色の濃い墓地の一角の煙る小雨に黒光りする、とある墓石の前にうずくまる若い女の影が夕もやの中ですすり泣いていたのである。

墓参のとき涙する光景は、まま見られることである。

しかし、初秋と云うには早すぎる肌寒い日の、しかも夕ぐれ時である。

霧のように細かく降りつづく小雨に頭から濡れて、うら若い女の傷ましいほどに、哀れにうちしおれ泣いている青白い姿が、その私の母親でもあろうか、墓前に濡れて並べられた、いくつかの玩具の自動車や電車を操作しては嗚咽する。その姿がわたしの視線を一時、蒼白な画面の中で凝結させたのである。

無論、その婦人ともその私とも無縁の私たちだから、所詮はその場の傍観者でしかないのだが、この場をただの「傍観者」であっていいのだろうか、この無情な現実を目前にして、と瞬間、私は感情のとまどいを覚えたくらい、それは哀れにも亦、無残な光景だったのである。

「生者必滅、会者定離」

人生は、常に無常である。会うものは、必らず別れると「大般若経」は教え、論している。

しかしながら、これはまたなんと云う悲しく無情な現実なのであろうかと私は思った。

だれかれの別なく「人間は生ある限り凡愚である」と私は常に思っている。

凡愚だからこそ、悟りえずして、このように情に溺れもするのだらう。なかなか、どうして「悟」の境地になど、容易なことでは、私たち凡人は到達できるものではない。だから

こそ、日常の修養が大切でもあり、又、日常の生活の中でつとめて、そう必掛けることによりすこしづつでも、その境地に近づけるのである。

露の世は露の世ながらさりながら

瓢々として、その生涯を詩作を介しての哲学的思索に終始した、あの高名な俳人一茶でさえ、所詮、思索ではついに悟りし得なかったその感慨をこの一句に洩らしている。

事情の如何は無論私の知るところではないが、とも角、なにかの事情で不運にも、最愛のわが児を無情にも掌中から奪い取られた、この若い母親の今は亡きその愛児への無限の愛着と、慕情が、この今生のものともし思えぬ青褪めた行為となつて、今うす暗く暮れようとするこの山峡の雨の墓地を、立ち去ることもできずに嘆きそして悲しんでいるのである。

『子供さんね……きつと』

と、そばから妻が云った。

その声で私は自分にかえった。

『可愛想ね……、でも、気の毒ね』

と、妻は付け加えた。

その妻の言葉に、なにか別の意味を私は感じた。

それは、ほんのわずかな時間の経過ではあったが、私たちは、ついに傍観者のままで、その場を立ち去ることにした。

なんとなくうしろ髪を引かれる思いではあったが、かえって他からの雑念を入れることが、そんな場合非情な仕うちのようにも思われたので。暮れるに早い、この山峡の墓地は、もう、うす墨色の宵がそこまできていたのである。

◇旅だちし子の

かの国は浄土なり

母よ、案ずな幸多き国

◇垂乳根の母よ嘆かず

一心に

弥陀を唱えよ救わるるべし

◇いとし子の成仏すなり

ひたすらに

阿弥陀仏 今ゆ 念じて給え

(この母親の愛しき心を慰めて)

なるほど「愛は惜しみなく奪う」と云うのは、こんなことを云うのだからかと昔の言葉を心の中で思い出しながら、帰りの車の中で今、見てきたばかりの哀れな光景を思い浮べているとき

『あれでは、迷うわ』

と、突然、妻が運転しながら呟やくように云った。

あまり気にしていない様子だった妻の口から、

『亡くなった仏さまが……』と、付け加えられた。

その悟りきったような妻の横顔が、心なしか私には冷たくさえ感じられたのである。

縁者の「死」に対する哀悼の情、諦観の度合、それぞれの事情で個人差はむしろあるであろう。しかしながら、これを、そく「大般若経」が説く「生者必滅」のことわりに、おきかえて割りきり、達観することは、私たち凡人にとつては、到底至難なことなのである。

家族の核化とか、やれ断絶とか、家族構成崩壊の危機に直面して懊悩する昨今の世相を背景に、ともあれ、この母親のわが児に対する愛情の厚さをしみじみと感じさせられ母の子に對する愛が、かくもいみじく、いつの世代でも不変でありますよう祈りながら、雨の夜の藤沢街道を急いで帰宅したのである。

その後、二回ほど墓参のため霊園に出かけそのたびに、あの婦人のいた墓を気にかけてみるが、いつも奇麗に掃除がゆき届き、美しい花が、いくつかの玩具の傍に供えられていて、家人が墓参した形跡を残してはいるが、その婦人とは、なぜかそれ以来、出会ったことがない。

幽寂な感一しおだった、あの宵の出来事ごとが幻のように今でも腋のうらに残っている。

「無常」と云う言葉があるが、たいへん佗びしい言葉である。

万象は日々に常ならず、で、いつどのような変化が自分たちの身邊におこるかわからないのが人生である。

鎌倉初期の歌人で、その非凡なる文才で、日本文学史上に不朽の名を残している鴨長明の随想録の一節に

行く川の流れば絶えずして、然かも本の水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは且つきえ、且つむすびて、久しくとどまる事なし。世の中にある人、またかくのごとし。

と、心して処世すべき人生であることを教えこの世は常に無常であることを論じている。

「ゆく川の流れ」は「元の水にあらず」で人生は、まことに、ひと瞬きの一閃の早さであると云うのに、怠惰な私たちは、自分たちの貴重な一生を、春はなやぎ夏は楽しみ、そして秋になれば憂い冬を嘆きながら、天地の限りなき優渥な恵みの中で、おおかたは無為の幾年月かの歳月をむだに過ごしてしまふ愚かなことと云うほかはないのである。

年のせいででもあらうか、私は近頃明日と云う日が来るのを、あやぶむことがある。

そんな時いつも私は、今、生きている「今日」の充実をまですなければならぬと云う切実な思いでいっぱいになる。

今日を充実して意義づけることが明日からの永遠を生かすことだと信じているからである。

人は皆、無意識に明日のあることを信じているが、天のまにまに生きている無常な世の中である「生」ある明日が必ずあると、一体誰れが云いきれよう。

「方丈記」が鴨長明の思想を長く今日に生かし、浄土信仰の奥義をつくした「選択集」が八百年の後の世の今日なお鑠として法然上人の徳を衆生に垂れている。この現実こそは、日々の修練が、日々の努力が、日々の充実がいかに肝要なものであるかを私たちに、きびしく教示しているのである。今日を充実することが、明日に生きむ為の要諦なのである。

無常の風は、花を散らすが、花は散りながらも、なおその風情を人々に惜しまれ、人々に讀えらる。

前世と来世の間の、ほんの束の間の現世である。いつ無常の風に散っても、悔いの残らぬ今日を過ごすことが、明日に、将来に生きている人間の生き方なのである。



に	こ
聞	法
く	語

人身を受けた喜び

法然上人の人と生活 (二)

宝田正道

仏教各宗では、一般に「三帰依文」を唱える前に必ず「人身受けがたし、今すでに受く。仏法聞きがたし、今聞くことを得たり」という偈文を読むことになっている。これは、「聞法の偈」ともいわれているとおり、『法句経』の「ひとの生を受くることはたかく、やがて死すべきものの、いま生命あるはありがたし。正法みちを耳にするはかたく、諸仏の世に出づるもありがたし」(一八二番)という一句の意味をとって、人身も仏法も受けがたく聞きがたいことを強調したもので、仏教の根本的な考え方を示す一例である。つまり、この世に生きとし生けるものの数は無量といつていいほどであるが、その中でたまたま人間として生れ出たということの幸いと喜びと

感謝の気持ちを謙虚に受止めるところに、仏教の出発点をおいたものと見ることができよう。

宗祖法然上人は、多くの祖師方の中でも特にこの点を重視され、人間としてこの世に生を受けたことを人一倍心から喜んでおられる有様が、法語の随所に散見する。

受けがたき人身を受けて、あひがたき本願にあひて、をこしがたき道心ををこして、はなれがたき輪廻の里をはなれて、生れがたき浄土に往生せん事は、よろこびの中のよろこび也。

(一紙小消息)

有名な『一紙小消息』のこの部分は、本願にあり、道心をおこし、輪廻の里を離れ、浄土に往生することとにも、なんといつても「受けがたき人身」を受けたことをまず素直にありがたいと感謝して、「よろこびの中のよろこび」と言っていられるのである。また、次の二つの法語は、上人が「人身」を受けることのいかに容易ならざる難事であるかを、繰返し繰返し仏典の故事を例にとつて強調せられた文章であつて、どれだけ上人が深い関心をもつて人身の得がたさを感じておられたか、そのひかれた譬喩を見てもうなずけるだろう。

ある時には、人身のうけがたきことばかりをおもひて、このたびむなしくやまん事をかなしめ。六道をめぐるに、人身を受くる事は、梵天より糸をくだして、大海の底なる針のあなを通さんがごとしといへり。(十二箇条問答)

まさにいま多生曠劫をへて、生れがたき人界に生れて、無量劫をおくりて、あひがたき仏教にあへり。釈尊の在世にあはざる事は、か

なしみなりといへども、教法流布の世にあふ事をえたるは、是よろこび也。たとへば目しゐたる龜の、浮木の穴にあへるがごとし。

(登山状)

前者の「梵天より糸をくだして」云々という譬喩は、『波利五戒経』に出ている話である。梵天がその住所の天界から一本の糸を垂らす。人が地上にいて、一本の針をもつてこの糸を迎え、針穴にこれを通そうと試みる。ところが虚空では旋風猛風が吹き荒れて糸を吹き流すために、どうしても針穴に通しにくい。人身を受けがたいことはこのような難事以上のものだ、というのである。また、同じく「大海の底なる」云々というのは、『菩薩瓔珞胎経』に出ている譬喩であつて、深く広大な海水中に一本の針を落してこれを探し求めようとする。それは大変にむずかしいことであるが、できない相談ではない。しかし、人が一たびその身命を失つてしまったならば、到底針を得ることはできない。人命はこのような大切なものである、というのがその趣旨である。上人は、この二つの譬喩を巧みにつなぎ合せて、人身の受けがたいことと人命の得がたいことを、一本の針に

たとえて示されたのである。

後者の「目しあたる亀の、浮木の穴にあへるがごとし」というのは、これまた人身を受け仏法にあうことのはなはだ難きものなることの譬であって、出典は『涅槃經』である。大海中に無量寿の盲亀がいて、百年に一度だけ水面に顔を出す。一方、その海上を一つの穴のある一本の浮木が波間をゆれながら漂っている。たまたま、このめくらの亀が海面に出たとき、この浮木に手さぐりでもぶつかることができたら、それこそ万々歳で、まさに文字どおり千載に一遇のチャンスであるが、そんなチャンスはめったに訪れそうもない。むしろそんなことが起ったら、それこそ奇蹟に近い。あるいは不可能といったほうがいいかもしれない。それほど確率ゼロともいうべきむずかしさである。法然上人は、われわれが人間界に生を受けて、しかもありがたい仏教にあうことができ、釈尊の在世時代に生れあわさなかつた憾みはあるにしても、とにかく教法流布の世にあうことのできた喜びは、あたかもこの「盲亀浮木の穴」にあうほどの感激であつた、と述懐しておられるのである。上人にとって、人身を受けた喜びがどんなに大きいものであつたか、察しられるであらう。

まことに人身を得ることはむずかしい。それは、一千万円の宝くじに当たるところの騒ぎではない。そんなことは到底比較にもならない。だから上人は、せっかく受けた人生の尊さを、ことのほか大切にするように、と常に仰せられている。その一例として、衣食住の三を「念仏の助業」ときめつけ、わが身を念仏のために「かへりみはぐむぞかし」と勵まされるのである。次の法語を読んでみるがよい。

衣食住の三は、念仏の助業也。これすなわち自身安穩にして念仏往生をとげんがためには、何事もみな念仏の助業也。三途へかへるべき事をする身をだにもすてがたければ、かへりみはぐくむぞかし。

(諸人勸化の御詞——『念仏問答集』『勅伝』巻四十五)

助業というのは「助け」という意味であるが、われわれが平素、何の苦もなく念仏を申すことのできるのは、口があり、その口が達者に動くからである。つまり、身体が健康であるからである。この健康のもとは何であるか、というと、ふだん摂生して身心を大切にいたわり、

衣食住に氣を配っていることが第一にあげられる。われわれは、凡人であるから、「三途へ帰るべきこと」すなわち、生れながらの煩惱によって一念一行みな地獄行きの種になるような罪をつくってばかりいるが、そんな哀れなわが身でさえ、いとしく可愛がって簡単に捨てようなどとは思わない。何はさておいても自分の身を、はぐくみ育てているのである。まして往生極楽を目指して、毎日毎時念仏を唱える身であつてみれば、大いにいたわつて大切にしなければならぬことは当然である。「往生ほどの大事を勵みて念仏申さん身」だから、「いかにもいかにもはぐくみ助くべし」といわれるのである。たとえ雨露をしのぐにしか足りない、粗末な掘立小屋に住み、寒さを防ぐだけのボロきれを身にまとい、わずかに飢えをいやすに足る芋がゆをすすつていても、念仏を相續するためには、最小限度、必要な生活の要件であるから、衣食住を助業と思つて大切にせよ、といわれているのである。

要するに上人は、人間としてこの世に生れたことが難事中の難事であつたことを思い、常にその尊い身体を大切に、衣食住さえ念仏の助業と考え、十分わが身をはぐくみ育てよ、と言われているのである。だから東大

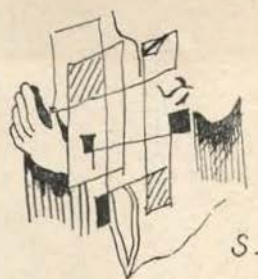
寺を焼いた平重衡に対しても、次のように諭されている。

受け難き人身を受けながら、むなしく三途に
帰り給はんことは、かなしみでもなお余りあり。
歎きても又尽くべからず。

〔平重衡に示す御詞〕——九卷伝卷二上〕

せつかく受けがたい人身を受けたのだから、そのまま何らなすことなく、あたらし人生を無にしてしまうことはまことに悲しむべく歎かわしいこと、せめて出家が許されなければ、髪を下ろさず、在家のままで疑心なく一心に称名をたしなみなさい。と勧められているのである。われわれも、この上人の尊い教えを体して、常に人身を受けた喜びをかみしめ、衣食住を念仏の助業と考えて健康に努めるように心がけなければならない。

新春早々、中野好夫先生は、「人は獸に及ばず」という偶感を草され（朝日新聞一月三日号）たが、はたしてそうであらうか。われわれは、法然上人とともに、人間であることの喜びを静かにもう一度考え直してみようではないか。



欧米宗教見聞録

第一回

教会

安居 香山

(大正大学教授)

千住ちよじゆうという所にて舟をあがれば、前途三千里の思い胸に
ふさがりて、幻の巷ちよまたに離別の涙をそそぐ。

行く春や 鳥啼なみだき魚の目は涙

芭蕉

奥の細道の「かどで」の一節で、芭蕉はこう綴っている。
前途三千里、孤独の旅にでる芭蕉が、江戸を去るに当って流
した離別の涙。大げさな話であるが、私もまた羽田を去るに
当って、涙こそ流さなかったが、四ヶ月の一人世界一周を思
うにつけ、一期一会という仏語にも思いを致し、離別の懐感
は、深いものがあつた。

旅とは、孤独と闘いながら、人生を省みるものである。一
人旅は、その意味では、よい修行である。馬小舎ならず、ホ

テルの一室であつても、それは変わらない。四ヶ月、私はよい
旅をさせてもらった。その間いろいろと見聞し、異国の人々の
温情に助けられ、時には身の危険に洒されながら、とも角無
事再び故国の地を踏み得たことは、仏恩と感謝する外ない。
すでに紀行のいくつかは、「中外日報」や「文化時報」紙
上にだしたので、重複するところもでてくるが、旅の締めく
くりをする気持ちで、綴ってみた。

○ 旅行の主目的は、自分の専門の研究調査であつたが、この
機会にできるだけ見聞してこようと心掛け、英・独・仏・伊
・北欧三国などヨーロッパ十二ヶ国を始め、米国各地を、歩
き廻った。観光とは歩くことであるという確信も、この旅で

持った。タクシーは勿論、電車やバスは、乗りなれぬと仲々乗れぬものである。そんなわけで、遠くにチャーチの尖頭が見えれば、とも角それを目掛けて、歩き続けた。これが一番確かで、しかも観光に最もよい。少し時間はかかるが、歩いている間に街の変わった風景も見、人情にも接し得て楽しい。時間のある一人旅は、歩くに限る。お蔭で私は、二足の靴を駄目にしてしまった。

観光とは、寺詣りのようなものであることは、日本も欧米も変らない。欧米ではやたらと教会の上がった尖塔が目につく。何処の街も、寂しい村も、教会の尖塔はついて離れな



ドイツ「ケルン大聖堂」

い。ドイツのケルン大聖堂などは、駅の前にあつて、この街を象徴している。道に迷ったら、その大聖堂めがけて帰ってくれば、中央駅に辿りつけるわけである。

共産国のモスクワやレニングラードにしても教会に事欠かない。現に活動している教会も多いが、多くは歴史的遺物である。赤の広場の南側にある聖ワシリイ教会は、十六世紀の中頃、イワン雷帝の勅命で建てられた教会であるが、九つの円柱からできたこの美しい教会は、おとぎの国のお城のようである。ソ連の政治の拠点であるクレムリンの中でさえ、アルハンゲリスキー寺院、ウスペンスキー寺院などがあり、ま



モスクワ「聖ワシリイ教会」

で教会でできたお城のようである。

こんなわけで、ヨーロッパの何処に行っても、教会には事欠かない。私は飽きることもなく、これ等の多くの有名・無名の教会を訪ね、日曜ともなれば、ミサにも出掛けた。ミサのことは、改めて纏めるとして、とり敢えず教会のことを、ここでは纏めておこう。

私の廻った欧米十三ヶ国は、いずれもキリスト教圏に属する。ソビエットさえもそうである。同じキリスト教圏と言っても、ローマカトリックもあれば、プロテスタント・ギリシヤ正教会もあり、又イギリス国教会のような特異なものもあ



スイス「チューリッヒの教会」

る。これを総括的に言えば、ヨーロッパの教会は歴史も伝統もあるので、それだけの観光価値もあるが、何分にも古いだけに内部は暗く、薄汚れ、現代人の教化の場所としては、古寺に行ったような暗さがあってよくない。しかし、それだけに荘厳味がある。これに引き替えアメリカの教会は、歴史も浅く伝統もないため、何処かあか抜けしていて明るい。おまけにベンキで美しく刷りたてであるので、よけいに明るい。しめっぽさが無いのは、アメリカ人の気性そのものである。おまけにアメリカの教会は、プロテスタント系統が多いので、祀っているものは十字架だけで、キリスト像などが置い



アメリカ「ワシントンの教会」



ワシントン教会の内部

てない。これは、ヨーロッパのプロテスタント教会でもそうである。それだけによい何かスツキリとした明るさがある。ステンドグラスなども極めて明るい色彩である。私はカメラを何時も持っていたが、ヨーロッパの教会の内部は何処も薄暗くて、写真を撮ることができなかった。たまにフラッシュを持っていったが、ミサの最中などは遠慮したため、余り記録は残らなかった。それに引き換え、アメリカでは、内部が明るいので、フラッシュ無しでも充分写真がとれた。

もう一つ余り感じがよく

無かったのは、カトリック系教会などでは、やたらにキリスト像があり、しかもその殆んどが切り傷から真赤な血を流したらしめていることであつた。私は日本で、円満莊嚴な仏像や仏画を見つけていたので、こうしたキリスト像には、この上ない嫌悪感を持った。欧米の文化を見る場合、キリスト教を離れては考えられない事は、百も承知であるが、教会内部で、こうしたものを見せつけられると、却って心が動揺する。西洋文化と東洋文化が、本質的に相違するのは、血の文化であるか、涅槃寂靜の文化であるかというところにあると言つてよいであらう。教会の入口には、必ず大きな掲示板が



ワシントン教会前の掲示板



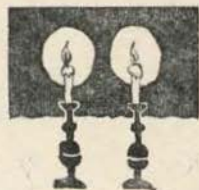
ノルウェー「村の教会」

でている。欧米の何処に行ってもそうである。そこにはその週の行事が、嵌め込み式のアルファベットで書いてある。これは仲々便利な仕掛けである。これによって、何時にミサがあり、誰のお説教があるかがよく分る。突然に訪ねて行っても、これを見れば大変よく分るので、便利なものである。私の旅行は主に都会を中心としたものであったため、どの教会もみんな大きく、立派であった。ゆうに五六百人は収容できるものが多かった。ケルンの大聖堂、バリーのノートルダム、ロンドンのウエストミンスターなどの教会は、千人を充分収容できるだろう。

そんな中で、ノルウェーの村の教会を訪れる機会があった。それはノルウェー海峡に臨むベルゲンの郊外の農村であった。たまたま社会探訪をする夜の観光バスがあり、夕方出発して農家に行き、そこで農夫たちと夕食を共にしながら、夕食後の団欒をたのしむという趣向であった。観光バスには四〇人程乗りこんだが、流石にここはノルウェーの西の端ということもあって、日本人は私だけであった。

夕闇せまる頃、バスはとある小高い丘の前に止った。その丘の上には、小さな教会がウツンと立っていた。ガイドのおぼさんは、もう六〇にも近いかと思われる品のいい婦人であった。彼女に引率されて教会の中に入ったが、百人も入れるだろうかと思われる狭さであった。ガイドは静かに坐するように指示し、少し説明した後、しばらくここで坐っていてくれるようにと言って、彼女もまた椅子に坐った。その内に、静かなオルガンの音が、堂内に流れて来た。多分聖歌の一曲なのである。四〇人ばかりの観光客は、このオルガンの音が響きわたる中で、咳一つせず静寂であった。私も又、この静寂の中で、まだ故国を立て半月ほどしか過ぎていないが、独り旅の中で味わった懷感を、静かにここで噛みしめた。夕闇と共に、堂内のローソクの光だけが輝いていた。いい知れぬ寂靜の中で、しばらく異国に居る私を忘れたほどであった。

心 願



—大正大学講師—

大 南 龍 昇

いまになって、年賀状のことを書くのも、いささか時期はずれの感が、しなくてもないが、「毎日元旦」の気概をもって生きよと教える人もあるから、常に新鮮な人生を生きよとするとするには、その年のはじめに立てた計を、毎日思い起してみるのも、あながち無意味なことではあるまい。

私は、ここ数年來、年賀状に、その時の自分の心境や願いを、簡潔な文章にまとめて説くようになった。禅家では、自分の悟りの心境を一句で表現せよという。そんなことにヒントをえて、試みるようになったことであるが、年賀状の草案をつくるのに、わりあい時間がかかったりする。忙がしい時に、くだら

ないことに時間をかけるものだと思ふで呆れることもあるが、すぎ去った年のことをふり返えり、おとすれる年を前にして、自分自身の心の中を整理してみるのに役立ってもしろ。

わずか葉書一枚の、それもごく限られた空間であるために、あまり長たらしく書くのも、と考える。また、印刷するから、個々の人に違つた文面を書くのとことなり、誰れにでも分つてもらえるようではなくて、という配慮もある。それに、賀状ではあつても、伝導の具にしたいという気持も、どこかに働かしている。このことは、恩師や先輩に届くことを考えると、少々礼を失することになる

が、それらの人々には、まあ、こんなことを考へていますといった私の気持が理解してもらえらうでなくてはならない。

前置きが、いささか長くなりすぎたが、今年には、こんなことを書いたのである。

あけましておめでとうございます。

年をとることによつて、おのれが、ほんとうに深められているか、高められているか、淨められているか、広められているか、進められているか、としきりに反省されるこのごろです。

こんなことを書くようになった経緯は、去年の暮に、仲間たちとの雑談のなかで、年をとることの悲しみ、苦しみ、そして年をとることのむずかしさといったことを語り合つたからである。釈尊は、人間の苦惱の一つとして、老化の苦しみをあげられたのであるが、それは、なにも七十、八十歳になつてからの老いだけをさしているのではあるまい。二十代には二十代の、三十代には三十代の老いの悲哀があるのではなからうか。

この頃、さかんに取沙汰されている中年の悲哀というものを、私はまだ知らない。まだ

まだ先のことも思っている。ただ三十年代に足を踏み入れてから、中年のそれが、一歩一歩近づいてくるような、なんともいえず無気味な思いがすることがある。

井上靖の詩集『北国』には、初老に達した男の青春への憧憬を美事にうたった「海辺」という散文詩がのせられている。

ある避暑地の海辺で、土地の中学生と都会から訪れた一団の学生がすれ違う。人かげもなく、夕闇のせまった浜辺で、すれ違った、というただそれだけの理由で、彼らは、忽ち入り乱れて決闘をはじめ、わずか三分たらずで、その場を立ち去って行くのである。作者は、そのありさまを見て、つぎのように詩う。

青春無頼の演じた無意味にして無益なる闘争の眩しさ。やがて海辺はまたもとの静けさにかへった。私は次第に深まりゆく悲哀の念に打たれたがら、その夜ほどこ遠く青春への嫉妬を烈しく感じたことはなかった。

この詩は、井上靖四十歳の時につくられている。作者は、全く無意味で無益なケンカをする学生たちに驚ろき呆れながらも、同時

に、自分には、すでに失われてしまった、学生たちのもつ若さに眩惑され、青春への嫉妬を強烈に感じたとき詩っている。ここには、青春期の若さと対比して、初老の、そして年をとることの悲しみが、せつなく詩われている。

— — — — —

かつて、恩師の一人から「人間、三十五歳までには、自分の手がけた仕事の見通しをつけるだけの力をつけておかねばならない」と諭されたことがある。十年程前のことであるが、私には、その師のいう三十五歳に、あと余すところ二年しかない。三十五歳といえば、一般に人生で一番油ののり切った年齢でもあろう。ライフワークを持つ人にとって、少くともこの年齢までには、仕事の中核はできあがっていないかならないということであろうか。

三十五歳というのは、釈尊が悟りを聞かれた年でもあった。仏伝の古い伝承のものによると、二十九歳で出家した釈尊は、七年間修行されたとするならば、正覚は、三十六歳の時に果されたことになる。また他の伝説によ

るならば、六年間修行したとあるから、丁度三十五歳で悟りを開かれたことになる。さきにのべた恩師のいう三十五歳云々というのは、釈尊の生涯になぞらえてでてきた師の人生計画の一端であったのかもしれない。それにしても、恩師のいう三十五歳を目前にして自身をふり返ると忸怩たるものがある。

ところで、わが法然上人は、三十五歳のころ、どこで、なにをされていたのであろうか。宗祖の経歴が比較的明らかになってくるのは、その生涯の後半になってそれも六十歳ごろからである。とくに二十代の中ごろから、四十歳までの事蹟は、どの伝記をみても、ほとんど不明であるといっても言い過ぎではない。ある伝記には、三十三歳の時、浄土の門に入る、とし、法華三昧を修したとも伝えている。また三十六歳の秋、華嚴經を読んでいるとき、机の上に小蛇わだかまると記している。主に叡山におられたことはたしかであろうがそのころの事蹟はこの程度のことしか分らない。宗祖の回心は、四十三歳に行われたのであるから、この伝記上の空白の時期こそ、宗祖が浄土の教えを開かれたため

に、最も苦悩し、学問の上でも、努力研鑽を重ねられた、まさに求道的情熱が燃尽った時期でもあらう。

三十五歳に成道され八十歳で入滅された釈尊、四十三歳で回心、そして釈尊と同年の八十歳入寂の宗祖、に見るように、仏者の求道心は年を重ねるごとに深まり、高まっていたようにある。

年をとることによって生じる悲哀、苦悩

は、その人の人生に対する姿勢とそれにもとづく努力によって克服されるのではなからうか。すなわち、人生を修行の場と受けとる生き方に切りかえることである。端的にいえば、おのれを深め、他の人々を仕合せにしよという願心を発することである。賀状に書いた自己反省の四つの柱になっている、深められているか、浄められているか、広められているか、高められているかという問いかけは、願心を調整するための基準にはかならない。これらの基準がどこからでてきたものか、これといった根拠があるわけではない。深め、浄めるといったのは、七仏通誠偈の

「自らの心を浄めること（自淨其意）」から発している。高め、広めるといふのは、自分の身近かなものに仏法を味わってもらうよう努力する心を盛んにしようとするところからきている。願心といえ、三心の一つの廻向発願心、すなわち、浄土に生まれたいと願う心、を思いだが、ここである願心とは、三心

ハガキでひと言

中 牧 千 明

（生青光ディレクター）

私の勤務先光明学園相模原高校は、毎授業が御十念で始まり御十念で終る、正に念仏学校です。週一回の月曜礼拝と宗教講話、月例の修養会、年三回の別時修養会（以上主に岡本学園長指導）を実施して、靈性の開発に師弟共々励んでおります。

また、現在学園内に光明会青年部の本部があり、そのお世話や、夏期には四泊五日の別時念仏会にも積極的に参加し、日頃の精進の

全部を含んだような意味であり、もっとも素朴に、自利利他を願う心というほどの意味である。仏教者であるかぎり、この願心の火を消すことは許されない。仏者であるからには、すべてのことが、願心に根ざしたものでなければならぬことを常に確認してゆかなければならないであらう。

仕上げをしております。さらに校則違反者に早朝と放課後の念仏修行が義務づけられているのも特色で、大半の生徒が手応え充分です。

昨年までは一学年五十名前後という小さな学園でしたが、中卒者の増加と教育方針が時代の要請するところとなって、俄に脚光を浴び、遠くは山口、佐渡等から浄土系寺院、光明会員の御子さんが、また創価学会員の御子さんもかなり入学しておりますが、光明主義は超在一的汎神教の教えで、宗派間の問題は皆無です。

七百名近い生徒を収容する校舎や施設の完備、教師、教育内容の充実等前途は多難ですが、仏縁の拡がりに思いを致せば、寒梅の凍しさに負けじと気張る昨今です。



仏説無量壽經 卷下(六)

村瀬 秀雄

一 第三邪淫の惡

入出費ニ損家財一事為ニ非法一。

三惡者世間人民相因寄生共居三天地之間一。延年壽命無二能幾何一、上有二賢明長者尊貴豪富一、下有二貧窮斯賤狂劣愚夫一、中有二不善之人一常懷二邪惡一。但念二姪妹一煩滿二胸中一、愛欲交乱坐起不レ安。貪意守惜但欲二唐得一、眊二昧細色一邪態外逸、自妻厭憎私妄

三惡とは世間の人民のあい因りて寄生し、共に天地の間に居る。延年の壽命はよくいくばくなることなく、上に賢明長者尊貴豪富があり、下に貧窮し賤おう劣愚夫があり、中に不善の人があつて常に邪惡を懷けり。ただ姪妹を念じてわづらいが胸中に満ち、愛欲が交乱して坐起に安からず。貪意守惜してただいたずらに得んことを欲す。細色をめんらいして邪態は外にほしいままなり。自妻を厭憎してひそかに妄りに入出し、家財を費損して事非法をなす。

(意訳)

第三邪淫の惡とは世間の男女が夫婦となり、相より相扶け

て生活を営んでいる所にある悪である。人間の寿命には限りがある、やがて尽きるものであるが、上には賢明長者、または尊貴富豪の者があり、下には貧窮卑賤、または虚弱愚夫の者があるが、それらの中には不善の人がいて常に邪惡の心を懷いている。この人たちは常に邪淫を欲して、そのために胸中は煩悶で満ちている。愛欲のために心が乱れ、そのために起つても坐つても落つことがなく心の安まることがない。そしてただ徒らに食つたり客氣したりして婦女を自分のものにしたいと望んでいる。これらの男女はともに好色で、互いに盗み見をしたり卑猥なことをして外聞をばからず恥じることがない。自妻を厭い憎み、ひそかに妾家に入出し、やがて家財を使い果し、遂には非法な事をするようになる。

二 第四妄語の惡

四惡者世間人民不レ念レ修レ善、転相教

令共為二衆惡一、両舌惡口妄言綺語。

讒賊鬭乱憎二嫉善人一敗二壞賢明一。於レ

傍快喜不レ孝二親一、輕二慢師長一朋友

無レ信難レ得二誠実一。尊貴自大謂二己有レ

道横行二威勢一侵二易於人一。不レ能二自

知一為レ惡無レ恥。自以二強健一欲二人敬難一。

四惡とは世間の人民の善を修せんことをおもわず、うたたあい教令して共に衆惡をなし、両舌し惡口し妄言し綺語す。ざん賊し斗乱して善人を憎嫉し賢明を敗壞す。かたわらにおいて快喜して二親に孝せず、師長を輕慢し朋友に信なく誠実を得がたし。尊貴自大にして己れに道ありといい、横に威勢を行じて人を侵易す。自ら知ること能わずして、惡をなして恥づることなし。自ら強健なるを以て人の敬難することを欲す。

(意訳)

第四妄語の惡とは世間の人々が少しも善を修めることを考えないで、お互いに他の惡を見習つて共に多くの惡を行い、二枚舌を用い、惡口をいい、妄言をはき、真実に反して飾りたてて物をいうことである。相手を讒言して、その心を害し乱し、善人を憎みねたみ、賢明な人をおとし入れる。夫婦は二人だけが楽しく暮して両親に孝養をつくさず、師匠や先輩を輕べつし、朋友に対しては信義がなく誠実さを欠いてい

る。自ら尊大にかまへ、己れ独りを正しいものとなし、無暗に威勢をはり、他人を軽んじ侮る。それでいて自分のことは少しも判っていないで、悪を行つても恥じることを知らない。自らの強健を誇り、そのために他人から敬遠されても、それを却つて歓迎している。

三 第五飲酒の惡

五惡者世間人民徒倚懈惰不二肯作レ善

治レ身修レ業。家室眷屬飢寒困苦父母

教誨瞋レ目怒膺、言令不和違戾反逆、

譬如二怨家一。不レ如レ無レ子。取与無レ

節衆共患厭、負レ恩違レ義無レ有二報償之

心一。貧窮困乏不レ能二復得一。辜較縱奪放

恣遊散。串二數唐得一用自賑給、耽レ酒

嗜レ美飲食無レ度肆心蕩逸。魯扈牴突

不レ識二人情二強欲二抑制一。見二人有レ善

憎嫉惡レ之。無レ義無レ礼無レ所二顧難一、

自用職当不レ可二諫曉一。

五惡とは世間の人民のしい懈怠にして、あえて善をなし身を治め業を修せず。家室眷屬は飢寒し困苦し、父母は教誨すれども目をいからして怒りことう。言令は不和にして違戾し反逆し、たとえば怨家の如く子なからんにしかず。取与に節なくして衆はともにうれい厭い、恩にそむき義に違ひて報償の心のあることなし。貧窮困乏にしてまた得ることあたわず。較縱奪にしてほしいままに遊散す。しばしばいたすらに得るにならいて、用いて自ら賑給し、酒に耽り美をたしなみて飲食にはかりなく、し心に蕩逸す。魯こたい突にして人情をしらず、強いて抑制せんことを欲す。人の善のあることをみて憎嫉し、これをにくむ。義なく礼なく、顧難するところなく、自ら用いて転当して諫曉すべからず。

(意訳)

第五飲酒の惡とは世間の人々がぶらぶらして怠惰であつて、あえて善を行わず、身を修めず、仕事を励まない所にある惡である。そのために家族や眷屬は飢えと寒さに困窮するので、父母は子供に教え戒めてやると子供は逆に目を怒らせて反抗する。子供は父母のいいつけに従わず、道理に反して反逆の態度をとるので、たとえば怨みあう仲のようであつ

て、親はむしろ子供がいけない方がよいと思うようになる。物をやりとりするのに節度がないので、人々は憂い嫌うようになるのであるが、それでも恩義にそむき、義理をたてず、報恩の心をもつことがない。こうして貧乏し困窮することになっても助けを受けられず得るところがない。また己れの利益を専らにし、他人の利益を横取りし、利益を得れば勝手気ままに遊び散じてしまう。こうした利益をたびたび得ると、それに馴れて自分の生活の資に供し、酒にふけり美食をたしなみ暴飲暴食をこととして、ほしいままに遊蕩にふける。もともと愚鈍で人にさからうから、人情を解し得ないで、強いて他人を押えつけようとする。善を行う人があれば、それをみて憎みねたみ、その人を悪と思う。義理もなく礼儀もなく、自ら反省するところがなく、自分は能力があると自負して他から諫めても耳をかそうとしない。

四 十日十夜の功德

汝等於レ是広植ニ徳本一。布レ恩施恵勿レ

犯ニ道禁一忍辱精進一心智慧。転相教

化為レ徳立レ善。正心正意齊戒清淨一日一

夜勝下在ニ無量寿国一為レ善百歳上。所以者何、彼仏国立無為自然皆積ニ衆善一無ニ毛髮之惡一。於レ此修レ善十日十夜勝下於ニ他方諸仏国大一為レ善千歳上。所以者何、他方仏国為レ善者多為レ惡者少、福德自然無ニ造惡一之地。唯此間多レ無惡レ有ニ自然一、勤苦求欲転相欺給。心勞形困飲レ苦食レ毒如レ是忽務末ニ嘗寧息一。

汝等はここにおいて広く徳本を植えよ。恩を布き、施恵し、道禁を犯すことなく、忍辱と精進と一心と智慧とをもつてすべし。うたた相教化して徳をなし善をたてよ。正心正意にして齊戒清淨なること一日一夜すれば、無量寿国にあって善をなすこと百歳するに勝れたり。ゆえはいかん、かの仏国土は無為自然にしてみな衆善を積み、毛髮の惡なし。ここにおいて善を修すること十日十夜すれば、他方諸仏の国土において善をなすこと千歳するに勝れたり。ゆえはいかん、他方の仏国は善をなすものが多く、惡をなすものが少く、福德自

然にして造惡のなき地なり。ただこの間のみに惡が多くして自然なることのあることなく、勤苦求欲してうたた相欺たいす。心を勞し形をくるしみ、苦を飲み毒を食し、かくの如くにそう務して、いまだかつて寧息せず。

(意訳)

汝らはこの惡世において広く功德のもととなる修行を積まなくてはならない。他人に恩を与え、恵みを施し、仏の戒しめをよく守り、苦痛や屈辱に耐え忍び、努力精進し、雑念を去って精神を統一し、智慧を修行しなければならぬ。そしてますます相互に教え導き、功德を積み、善行を修めなければならぬ。五惡を廢し五善を修め、日常の動作をうつつしんで心を清淨に保つことが一日一夜あったとすれば、その功德は無量壽國において百歳の間にわたって善を修めるよりも、もっと勝れた功德となる。そのわけは何かというと、かの仏の淨土は無為自然の清淨な國土であるから、自然に多くの善が行われ、毛髮ほどの僅かな惡といえども存在しないからである。またこの世において十日十夜にわたる善を修めたとすれば、その功德は他方の仏國土において千歳にわたって善を行うよりも、もっと勝れて功德となる。そのわけは何かというと、他方の仏國土では善を行うものが多く、惡を行うものは殆んどないからであり、福德が自然にそなわり、惡

をつくる者がいない境界であるからである。ただこの世だけは惡を行うものが多く、従って福德が全く少ないのであって、この世の人々はつめめ苦しんで欲望の達成を求め、しかも互いに偽ったり欺いたりしている。人々は心を勞し、身を痛め、苦を飲み毒を食するような生活を送り、このような生活に毎日を忙しく暮し、いまだかつて一日として安らかな心で憩うことがないのである。

五 天下和順す

仏所ニ遊履ニ國邑丘聚靡レ不レ蒙レ化。天

下和順日月清明、風雨以レ時災勸不レ起。

國豐民安兵才無レ用、崇レ德興レ仁務修ニ

礼讓一。

仏の遊履するところの國邑丘聚は化を蒙らずということなし。天下和順し、日月清明なり。風雨は時をもつてし、災勸起らず。國は豊かに民は安くして、兵戈用ゆることなし。德をあがめ仁をおこして、つとめて礼讓をおさむ。

(意訳)

仏が遊説して周られた國や村や里にあっては、仏の教化を

蒙らない所はどこにもなかった。これらの地方では天下は平和で秩序正しくなり、日も月も清く明るく照らしていた。風や雨は時になつて適宜に吹いたり降ったりして、災害の起ることもなく疫病が流行することもなかった。国は富みさかえ、人々は安穩に暮し、兵士や武器を用いることがなくなつた。そして人々に互いに徳をあげ、仁を尊び、礼儀と謙讓の道を修めていたのである。

六 念仏は大利を得る

其有レ得レ聞ニ彼仏名号一歡喜踊躍乃至一

念、当レ知此人為レ得ニ大利一。則是具二

足無上功德一。

それかの仏の名号を聞くことを得ることありて、歡喜踊躍して乃至一念せんに、まさに知るべし、この人は大利を得たりとなす。すなわちこれ無上の功德を具足す。

(意訳)

もし無量寿仏の名号の功德を聞いて極楽往生をとげることをお願い、歡喜し踊躍して生涯を通じ念仏を相続するか、又は臨終に最後の一声の念仏を唱える人があるならば、まさに知るべきである。この人は淨土に往生できるという大きな利益

を受けることができるのである。即ちこの人は念仏によつてこの上ない功德を具えることができるのである。

七 念仏だけ後世に遺す

当来之世経道滅尽我以ニ慈悲一哀愍、特

留ニ此經一止住百歳、其有ニ衆生ニ値ニ斯

經一者隨ニ意所願一皆可ニ得度一。

当來の世、經道滅尽せんに、われ慈悲をもつて哀愍し、ひとりこの經を留めて止住すること百歳ならしめん。それ衆生ありて、この經にあわんものは、こころの所願に隨つてみな得度すべし。

(意訳)

時代が下つて末法万年の世となり、すべての經法が滅し去り、諸行往生の教えがなくなつてしまふ時代に至つても、仏は大慈悲の心をもつて人々をあわれむが故に、ひとり無量壽經だけを百年の間この世に止めおき念仏往生の教えだけを残して法滅百年の時代を潤おすであらう。その時期になつて人々がこの經典にあうことができれば、人々は心の願ひに應じて、極樂淨土に往生することができるのである。(終)

念佛ひじり三国志

(十)

一法然をめぐる人々

寺内大吉

挿絵 松濤達文画



禁裏の清涼殿では毎年五月、最勝講という仏事が五日間にわたって営まれる。

最勝講とは天下泰平を祈念する行事だ、と兼好法師は「徒然草」で説明しているが、この天下泰平の意味が複雑である。

仏事の内容は問答が主体をなしている。南都北嶺からそれぞれ講師と問者が出て、質疑応答のやり取りをする。ただし激しい論戦ではなくて、近年は多分に形式化していた。

古い法相三論の思想と、新仏教たる天台止観との有和交流が目的だった。仏法のこの思想統一こそ天下泰平の基礎となる。最勝講の発想はそこにあった。

だから最勝講に列席できる南都北嶺の高僧学匠は、当代一流と格付けされたことにもなる。

明遍は、五条大納言邦綱の推挙もあって、承安元年このか

た、欠かさずに南都の出講僧として選ばれるようになった。とりわけこの承安三年は、結願の五月二十七日の夕座、三論義を講ずる大役をふりあてられた。問者は比叡山の願忠であった。

形式的な質疑応答なので、最勝講第三日目の朝、昇殿してきた願忠を、清涼殿の外廊下でとらえた。結願の夕座で、自分が講じたい内容をあらかじめ伝えておくためだった。立ち話をしている彼らの横を、願忠の師である願真僧都が通りすぎていった。

「小禅師どのは三論第一の学匠。何を伺っても即座にお答え下さる。ただし願忠よ、つまらぬ質問だけはせぬようにな」こんな言葉をかけて去った。

願真僧都とは「小禅師」と呼ばれるような間柄であった。

願真は葉室流願隆の孫で、その願隆の実弟長隆の未亡人が信西入道最初の妻である。兄遊蓮房円照たちの生みの母親である。近い将来に天台座主の地位を約束された比叡山では超一流のエリート僧だった。

この願真僧都が数刻後、最勝講のまったなかで、考えられぬような態度を万座に示したのである。

この二十五日の講座、講師は比叡山の法橋知海だった。問者は興福寺の相覚で、次々に天台止観に関する質問を發し

あらずし

姉小路の旧信西邸に承安四年（一一七四）の秋は深い。父の非業の最期を喩えに仇討のむなしさを諄々と説く法然に、西光はまだ合点がいかぬらしい。夜も更けて西光が席を立つと、法然は円照にふとひとつの決意をもらす。それは近く黒谷を離れるということであつた。そして、西山を訪れるまでに義信房を念仏者に改倭させるように要請する。

姉小路邸に院のお側より紀伊の二位が円照を尋ねたのはある日の午後だった。今更でもなかったが、親しく後白河院と接した円照は、平清盛と院をめぐる深い対立に驚くが、それにもまして人の世の絆の不可思議さには心打たれるものがあつた。西山広谷へ戻るとすぐさま義信房の庵室を訪れた円照であつたが、すでに木々の間には不吉は白煙が立ち登っていた。まさしく西光法師たちは「天誅」と称して、義信房を一本の雑木の幹に私刑していた。激しく暖こんで全身に発熱を感じた円照は、悪法師の新しい塚の前で静かに読経をするのだった。

た。きわめて常識的な内容であつた。

知海は老齢で耳が遠い。当然かたわらに控える願真僧都が介添え役として答えねばならない。ところが終始口を真一文字に閉じたまま一語も発しなかった。

問者は立場に窮し、また堂内に居並ぶ高官たちも白けきつた気分になった。

——もともと狼籍なり。

と、当時右大臣として列席した九条兼実はその日記玉葉のなかで憤慨している。

叡山第一の学匠顯真僧都である。質問の内容に暗い道理はない。廟堂の高位顯官を前にして最勝講を蹂躪するかのような顯真僧都の態度は沈黙のなかで何かを訴えようとしている、と考えねばならない。

明遍は、清涼殿の前庭で弟子の顯忠をつれて宿房へ引揚げてゆく顯真僧都をとらえた。

「さきほどの仕儀、僧都の真意をおうかがいしたいところです」

年齢で十歳ほどの開きがある先輩だった。態度言葉には恭敬をこめたが、しかとした返答を、明遍は求めなかった。

「いや、あんな最勝講とは永遠に訣別致そうと思つてな」

「最勝講に訣別を——」

「さよう。全くくだらない。最勝講だけではない。この顯真、思う所存もあつて今後いっさい晴れがましい席へは顔を出さぬことに決めました。いや、明遍どの。この顯忠は違います。結願の座は、きちんと勤めさせます」

と、かたわらの弟子をかえりみて、結願の夕座では法に従つて問者の役割を果たさせる。決して貴僧には恥を掻かせぬ

と誓つた。

「それは出離のご決意で」

「出家の身が、今さら出離の決意も異なるものじゃが、明遍どの。そなたはお感じになりませぬか。名慾を離れたはずの出家が、権力の収奪に明け暮れております。やれ院の御所だ、平相国よと……つくづく呆れはててしまいます」

「しかし天台座主を眼前にした僧都が、そのようなことを申されては、山門も崩壊致さねばならぬでござりましょう」

「崩壊？ いやすでに崩壊しきっております。あるお方の如きは、仏道修法なぞ上の空で、領地莊園の掻き集めに狂奔し、その目的で衆徒の武装強化ばかりに専念する始末です」
顯真僧都はよほど感性の強い人らしかった。語りながら足もとの春草を、いらだたしげに踏みくだくのである。

あるお方とは、現在の天台座主明雲僧正を指しているに違いない。

明雲は平清盛一辺倒で、その権力をかさに着て、南都諸寺の莊園を次々に収奪していった。ために南都の僧兵は怒つて、近年何度かにわたつて御興をかついで強訴に及んでいく。

巷では南都北嶺の衆どもが血で血を洗う闘争に明け暮れるさなか、廟堂で長袖の高僧学匠が馴れ合いの問答とは、愚に

もほどがある」と顯真僧都は激昂しているのである。

「僧都には山を降りて……」

「いっさいの官職を捨てます。大原へ隠棲する所存です」

顯真はきっぱりと言いきった。

大原の里には、三千院や勝林院など比叡山の別所があった。山上の俗塵を嫌った求道者たちが、もの静かに修法する隠棲の地であった。

「初めから出直して、仏法をきわめてみたいと思います。それも知識や論説ではない仏法です。ほんとうに自分が救われるのかどうか。もう一度出直してきわめてみたいのです」

この年、顯真僧都はすでに四十二歳。しかし青年のような眸を輝かして悩み、かつ求めていたのである。

青年と言えば明遍たちが立ち話をしている前庭の向う端では、若い公達が二人、長袖をひるがえして蹴鞠にうち興じている。

「明遍どのも一度、大原へお越し下さい。とゆっくりと三論義を聞かせて下さい」

「必ず参上致しますよう」

この承安三年を限りに顯真僧都は二度と最勝講へ姿を現さなくなる。一切の名利から遠ざかり、大原の里勝林院へ隠棲した顯真が、そこへ法然を招いた有名な大原談義は、ずっと

後のことである。顯真が天台座主に補された建久元年の直前にあたる。

二

ところで顯真僧都の師弟を見送った明遍は、もう一度清涼殿へ引きもどしていった。そこには未だ東大寺からやってきた仲間の僧たちがいるからである。彼らと今宵は宿房にあって光堂に宿泊するのである。

足もとへ蹴鞠が転ろがってきた。

前庭の端で若い公達がうち興じていたものが、外れて転ろげてきたのである。

明遍は蹴りかえしてやろうと片足をあげた。だが空を蹴って、尻から落ちた。

笑い声が明遍の頭上でひろがった。

「馴れぬことは、なされぬがよい」

いやに大人びた口調で、たしなめる。見れば未だ十五、六歳の少年だ。

「私は東大寺の明遍だが、あなたは？」

いささかムツとなって若い公達を見上げた。彼にかわっ

＜蹴鞠＞



て、蹴鞠仲間の公達が紹介した。それも威丈高になって。

「こちらは小松内府の御曹子、維盛卿です」

平相国清盛の直孫だった。

それでも維盛は起き上がるとうする明遍にやさしく手を貸した。

抜けるように白い肌をしている。形のいい瓜実顔のなかで眸が黒く輝いている。恐ろしいばかりの美貌であった。

「明遍律師と言えば故信西入道のご子息で」

相変らず大人びた口のききかただ。

「そうです」

「それなら、言いたことがあります」

何やら教科書でも読み上げるみいたな調子だ。

「何でしょうか」

「信西入道は平氏の一門ではありませんか。その一族が南都には沢山いらっしゃる。あなたをはじめ東大寺の敏覚僧正、興福寺の覚憲法印。それなのに南都の衆徒はなぜ平氏に恨みをいだいて叛き続けるのですか」

「……」

「あなた方が怠けているとしか思えません」

太刀を帯びていたら一刀のもとに斬り捨ててしまいたかった。小童っぱが何を吐かすか！

しかし罪はこの若い公達にはない。と明遍はわずかに激怒を制した。

平氏に非ずば人に非ず——

これは清盛の妻時子の兄時忠の暴言だが、それを暴言と感じないほどになっている平家全員の思ひ上がりと言わねばならない。

「世の中には……」

と、明遍は鋭い視線を維盛の面上にあてた。

「世の中が、どうかしましたか」

「愚か者ばかりがはびこっています」

「南都の衆徒のことですよ」

維盛は手前勝手に解釈する。頭脳の構造がそうになっているようだ。

「愚か者ばかりが……平相国によろしくお伝え下さい」

せめてもの皮肉であった。むろん通ずる道理はない。

夜の六波羅は、京のどの街よりも明るかった。家々は軒下で景気良く火を焚いていた。火の始末は、家人がする必要はない。ひっきりなしに見まわってくる一団の武士が面倒をみるのである。それも消えようとするかがり火に薪を加えるのが彼らの仕事だった。

不審の者をうつつかせるな。そのためには街を隅々まで明

るくすることだ。

平清盛の敕命であった。

この敕命が徹底したのは、平家の本拠、六波羅屋敷を取りまく家々の殆んどが、一族郎党で占められていたからだ。この承安年間、六波羅の街には五千二百戸に及ぶ武家屋敷が建ち並んだと伝えられる。

だから一歩この街へ足を踏み入れると、

「むっと平家の匂いが漂ってくるでしょう」

と、五郎次老人は憎々しげに言い放った。

例の火廻りの隊伍とすれ違ったあとも、

「ああいうのを、火焰地獄の羅卒と申すんでしょうなあ」

と明遍をふり向いて笑った。

「おい、声が大き過ぎないか」

「なかに悪くしてもこの老いぼれ首が吹っ飛ばすむ話ですよ。惜しい命ではない」

「お前はそうでも、わしは困る」

「おや、ご出家の身でもやはり命は惜しゅうございますか」

「惜しいとも。真の悟りに達するまでは命が幾つあっても足りない」

五郎次老人は、明遍が京都へ出てきたとき、いつも宿房にする光堂の鐘つき男であった。

どんな素姓の男か、誰も知らない。光堂へ来るたびに明遍は二言三言かわす程度だったが、ただ者ではないにとらんでいた。以前は然るべき身分の男だったに違いない。

最勝講も結願となった今宵、老人は明遍を夜の散策に誘った。その誘いの言葉が面白かった。

——六波羅へ平家の鬼火でも見物にゆきませんか。

明遍は二つ返事で応じた。

「それにしても平氏は妙な場所に街造りをしたものです」

「うむ。ここは墓地と地続きだ」

「六つの原、六原と呼んでいました」

六波羅は六原と書いた。洛北にひろがる鳥辺野の入口にあたる。その鳥辺野は昔から都の人々が眠る墓地になっていった。それも身分の高い者ではない。無名な庶民たちが埋葬されている。

それだけに埋葬も乱雑で、回向も放漫だった。死因も恵まれぬ者が多かったに違いない。暗夜にはこれらの亡霊が六原をさまよい歩く、と噂されていた。

古くからあった珍皇寺、近くでも空世上人がこもった六波羅密寺——寺しかない地帯だった。そこへ清盛の父平忠盛が来て邸を建てた。卑しい身分だったので、禁裏近くに住むことをはばかったのだろう。

そこが今や政治権力の中心地となってしまうのだ。陰々とひろがる亡霊の原野の一角に突如として不夜の街邑が出現したのだ。

六波羅の街がきれた。二人は古さびた珍皇寺の前へ出た。

「六道さんだな」

明遍は幼い日、母親から聞かされた話を思いうかべた。

六原は仏教の六道思想と結びついて、入口の珍皇寺は六道さんと呼ばれた。本堂の前が六道の辻で、娑婆から地獄へ通じてゆく接所である。成仏できぬ人間が、この六道の辻を往きつ戻りつして、地獄、餓鬼、畜生などの六道を輪廻するのである。

「小野篁（たかむら）が夜ごと地獄へかよい、閻魔と話をしたというのは此処だな」

「この寺を通り抜けて鳥辺野の墓地へはいりこんだら、閻魔なぞ幾人もいるでしょうな……あれを、ごらんさない」

と、五郎次老人は境内の鐘樓を指さした。

「あの鐘がどうかしたのかね」

「わしはあんな光堂にいるよりも此処の鐘つき男になりたかったんです」

「なぜ？」

「この鐘はね、撞くたびに鳥辺野の亡霊が一人よみがえって

くるんです。平家に恨みをいだいて死んだ亡霊だったら、どうですか」

「どうか、とは——」

「亡霊が一人現れるたびに平家侍が一人呪い殺されるんです」

「五郎次、お前はよほど平家を恨んでいるようだな」

「亡霊があのかがり火に乗りうつって、屋敷も人間もみんな焼き殺してしまう」

「しかし六波羅屋敷には阿弥陀堂がある。空世上人が信仰された阿弥陀だ」

「平相国はその阿弥陀さまのお加護にすがっているとおっしゃるんですか」

「阿弥陀仏は、救いの仏だ」

「そのとおりです。でも阿弥陀さまは、特定の人間だけに慈悲を下さる方ではございません」

「……」

「平相国がいくらお金や宝物を積んでも、あの人だけを救ったりは致しません。みんなをお救いになるのです。鳥辺野をさまよう亡霊のすべてにお慈悲を下さるんです」

「そなた、なかなか仏法にくわしいではないか」

「光堂で十四年間も鐘を撞いてきました。それぐらいのこと

は判ります」

「昔の身分は何だ。僧か、武士か」

五郎次老人は微笑をふくんだままで、答えようとはしなかった。

三

珍皇寺の境内を抜けていった。そこから先は、六波羅の灯が嘘みたいな鳥辺野の闇である。

「何処へゆく？」

「亡霊にお会いになりたくはありませんか、明遍さま」

五郎次老人の声がぶ気味に響いた。

「わしに小野篁になれと申すのか」

「篁さまが会って閻魔よりもっと凄さまじい亡霊です」

老人はすたすたと先を歩く。そのうしろ姿には、有無を言わせぬ強烈な吸引力のようなものがあつた。

魔力か。それとも明遍自身がこの老人へ寄せた好奇の念だろうか。

丈高い草をかき分けて歩く。時折蹴爪つきそうになるのは、塚の土盛りを踏んだからであろう。

＜墓地に行く＞



闇はいよいよ深くなる。もう前をゆく老人の影も拾えないほどだ。足音だけを頼りについてゆかねばならない。

こんもりと盛り上がる丘が前面に立ちふさがった。老人はその裾をめぐってゆく。

「足もとに気をつけて下され。水が流れていますから」
月でもあったら、この流れは恰好な道案内になったことだろう。

「さて此処から登りになります、明遍さま、流れを飛んで下され」

立ち停まって明遍が追いつくのを待ち、老人は手をさしのべた。

足もとがごつごつした石の道に変わった。時折、突出した石塊に足を取られる。

「この石塊は——」

「地藏さまや無縁仏の石像がごろごろしているんですよ」

丘の中腹まで登った。石塊がなくなつて、やわらかい土を足先に感じた。五郎次老人は、そこで声をかけた。

「菊？ わした。開けろ」

俄かに明遍たちの周辺が明るくなった。丘の肌から光りがこぼれ出た。

そこは洞穴だった。奥で燈心がまたたいている。人影が二

つ動いた。

洞穴は入口に錠が垂れ下がっていて、奥の燈心をさえぎっていたのだ。

錠をもたげて立ったのは、一人の老婆であった。

「菊、客人をお連れ申した。ご立派なお坊さまだ」

老人はもの馴れた足取りで洞穴の奥へ進むと、燈心の下に坐った。その土壁に童子が一人、もたれている。

「明遍さま、これはわしの妻で、菊女と申します。それと、此方は姫君です」

なるほど童子と見たのは間違いで、身体こそ小造りだが、また衣類も粗末だったが、肌白く黒髪にも一杯艶色をふくんだ娘であった。

「姫君と申すと、どちらの？」

「さる高貴なお方の姫君とだけ申しておきましょう」

しかしその美しい顔をじっと見つめていた明遍は、次の瞬間飛び上がらんばかりにおどろいた。

姫君の顔が突然割れると、大口をひらいて、けたたましく笑い出したからである。

「五郎次、この方は？」

「若い殿御をごらんになると、いつもこのように笑い出すのです。そのあとは……」

まるで老人の言葉で操作されたように、娘は明遍の方へ身を傾けてくると、頸に白い腕を巻きつけた。

「菊、止めてあげろ。明遍さまが気味悪がる」

老婆は歩みより、何やらあやすような言葉を吐きながら、娘の腕を明遍の頸からほどき取った。

「明遍さま、お判りでございましょう。姫君は狂っておいでなのです。生きた亡霊なのでございませう」

老婆が瓶から濁り酒を汲んできた。五郎次は土器を舐めながら語り出した。初めて姫の出自も明らかにした。

それによると彼女は平治の乱で死んだ源義朝の長男、悪源太義平のわすれがたみだという。父義平と死に別れたのが三歳。母親も殺されたが、乳母の里方に引き取られ、十四歳までは無事に育てられた。

ところがその年、平家の執拗な探索でついに召捕られてしまった。

「平治の乱から十年以上も過ぎていたんですよ。それでも義平さまの豪義な血を恐れてか、平家は許さないのです」

「何をしたのだ」

「六波羅へ引立ってゆき、雑兵どもの餌に供したのです。薬師堂へ檻禁して、朝から晩まで男の猥褻のままになりました。姫はすっかり頭がおかしくなつて、することと言つた

ら、あのことしかごさいませぬ。やっとの思いで、私奴が姫を盗み出して、此処へおかくまい申上げたのです」

「五郎次、するとそなたは？」

「今さらかくし立てしても詮ないこと。さようでございませぬ。私は義平さまに仕えた小松嘉門と申す源家の武士。そして妻の菊は姫の乳母だったのでございます」

平家を呪う五郎次老人の態度が、これで理解できた。

しかしこんな色狂いの娘を、鳥辺野の洞穴にかくまうて、五郎次夫婦は今後どうするつもりなのだろうか。

明遍は、たださないではおれなかった。

「今後どうするつもりかと……何もございませぬ。姫を私たちの眼が黒い間は、いつまでもお守りするだけです」

「ただそれだけか」

「ああ明遍さま。情けないことをおっしゃらないで下さい。

あなたも立派なご出家ではございませぬか。悲しい人を、守ってあげるだけで、み仏の慈悲を受けられるのではないでしようか。私たちに出来るのは、それだけです」

そこで、妻の菊女も言葉をさしはさんだ。

「私としては、こうしてお守りをしているうちに、姫のおつむが少しでも快方へ向ってくれる。それだけを念じているのです」

明遍は、おのれの浅基な考え方を恥じた。

夫は光堂の鐘樓で朝晩に鐘を撞いている。妻はこの洞穴で狂女の守りをしている。

何の目的もない。旧主源家への忠誠心ですらないであろう。頭が狂い、男どものなぶりものになっている娘を、ひたすらに被護する。それだけの純粹無垢な善意だったのだ。

なまじ仏法の理屈をこねまわす自分らには持ち合せていない善意かも知れない、と明遍は思った。無名な庶民だけが持っている生き方だ。

「お願いです。明遍さま。姫のために、お経を、有難いお経を読んで下さい。義平さまの霊を慰さめてあげて下さい」

明遍は立ち上がると、洞穴の外へ出た。入口のかたわらに石地蔵があった。その前に坐りこむと、般若経を誦しはじめた。

五郎次夫婦も明遍の背後にぬかずいて合掌している。

ただ読経の合い間を縫うようにして、狂女の笑い声が痕高く洞穴のなかでこだますのであった。それはこの鳥辺野の虚空にさまよう全亡霊たちの笑い声だったのかも知れない。

(つづく)

二 編集後記 二

○今年度よりひさかたぶりに編集後記を復活させました。時節折々の話題をいろいろ提供できると思います。

○二月十五日は釈尊がご入滅された日です。涅槃像には、画面中央に頭北面西の釈尊が横たわり、その周りを菩薩がたが囲み、十大弟子をはじめ比丘や比丘尼たち、多くの善男善女と鳥獣虫魚の動植物、草や木の植物にいたるまで、悲しみに泣きうなだれている情景が描かれている。大聖釈尊の偉大なる死を越えて涅槃に入りたもうお姿に合掌するのみである。人生最大の峻厳な事実である死に対して、私たちは等閑視してよいはずがない。

○最近「ぼつくり寺」として脚光を浴びている奈良の浄土宗清水山吉田寺には、今日も安らかな死を願って参詣する人びとがあとを断たない。このお寺を訪れる老人は年

間四万人を超えるという。六十才以上の老人の自殺者が六千人を超え、その後も更に増える傾向にある。福祉国家が強調されるさなか、孤独と病苦に追いこめられた老人たち、健康であつてもその姿をみて心痛めている多くの人びとの胸のうちのやりきれなさ、木魚の念仏となつていのである。現代人の病める魂を救う真実の念仏を見直さねばならない。

○仏教の本の売れゆきは、静かなベストセラーだそうであるが、テレビやラジオを通じて仏教の説教もなされている昨今である。今度は、ダイヤルを廻すと法話が開けるといふ、いわゆるテレフォン法話がおめめした。(〇四五)三二一〇三三番に電話をすると有難い三分法話が開かれる。内容は毎週変り、なかなか好評である。

○旧臘本誌同人安居香山先生が、四ヶ月に亘るフランスを中心とした欧米諸国留学から帰国されました。今月号から、その成果の一端を執筆いただきます。ご期待下さい。

「浄土」購読規定

一部 定価 百三十円
(送料十二円)

会費一カ年金一、五〇〇円
(送料不要)

浄土 二月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十年一月二十五日 印刷
昭和五十年二月一日 発行

定価 百三十円

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒一〇二 振替東京八二一八七番

昭和十年五月二十五日発行
昭和五十年一月二十五日発行
郵便物認可
(毎月一回一日発行)
昭和五十年二月一日発行

「浄土」教化トラクト

『ひがん会』春季号

新書判・表紙共 12ページ

定価1部 20円 (200部以上18円 送料実費)



『五重相伝の手引』

A5判 16ページ 定価 85円

(200部以上 80円・送料実費)



『和文浄土三部経』

附 法然上人撰「三部経釈」抄述

新書版 204ページ 定価200円



好評『法然上人と浄土宗』

B6判 96頁 定価180円 (〒70円)

(200部以上 単価160円 送料実費)

現代に生きる法然上人のみ教えを、平易に解説。併せて念仏信者としてあるべき道を示したトラクト。施本等に広くご利用下さい。



〒102 東京都千代田区飯田橋 1-11-6

発行所 法然上人鑽仰会

電話 (03) 262-5944 番

浄土

第四十一卷

第二号

定価金百三十円(送料十二円)